



水と都市

田村 明

昔の長安の都、今の西安からいわゆるシルクロードを西へ向かう。はるか敦煌に近く酒泉という町がある。町は碁盤の目になっており、その中央に鼓楼がある。かつては刻（とき）を知らせた。東西南北の四つの門の頭上にそれぞれ「東迎華嶽，南望祁連，西達伊吾，北通沙漠」の文字が印されている。

私は何度かこの四文字を見上げた。「北通沙漠」というのが何とも恐ろしい。いま通ってきた一木一草もない灰色のゴビの沙漠を思いだす。

砂漠ではない。水が少ない沙漠である。ゴビは砂ではなく灰色の礫で、強い陽にあたってキラキラとゆらぐ。湖のように見える。蜃気楼である。たどりついても水はない。あの焼ける日中の沙漠は人の気を狂わすだろう。方向感覚を失い迷いこんだ人を帰さない。

向こうにわずかに緑が見えた。オアシスである。水が流れ、鶏が鳴く。水のあるところに初めて人が住む。水の無い沙漠は死の世界である。酒泉も大きなオアシスの都市である。美しい青い泉がこんこんとわいている。昔、霍去病將軍が、一瓶の酒をここに入れて皆で平等に酒を味わったという伝説がある。泉の水は、上等な酒のように美味であったということだろう。

* * *

日本はこんなに厳しく水のことを考えなくてすむモンスーン地帯にあった。時に干ばつはあったが、水はいつも身のまわりにあった。都市にしても、田

園的要素をかかえこんでいた。

ところが戦後、いままで経験したことのない急激な都市化の時代に入った。人口は密集し、産業活動も活発化して騒音や汚水、汚れたガスを放出した。地価は急上昇し、もはや田園的なゆとりを保ちえない。川や海は汚れ、また消えてゆく。緑もまた消える。代わりに鉄とコンクリートで都市は固められ覆われた。道も、川も、建物も。現代都市は水を失った沙漠になった。

21世紀は都市の時代である。人は都市に生まれ、都市で働き、都市に住み、都市で死ぬだろう。人間の全生活を支える都市が沙漠であってよいはずはない。美しい水と緑を都市に取り戻すのは、人類が都市時代を生き延びられるかどうかの条件である。

いずれの時代、いずれの国でも水の無いところに人は住めない。水は飲み水としてだけではない。水と緑は人の心を安らかに生き生きと潤いもたせる。乾燥したアラブの都市では水や緑がとりわけ重要視されている。水は人の生命を支え、人間らしさをはぐくむ。

水郷都市、柳川でさえ、その水路の大半を埋める計画があった。広松伝・都市下水路係長（現・国土調査課課長補佐）の体をはった努力がその計画を覆した。係長の反乱といわれた。いま水郷柳川は市民の協力により徐々に蘇りつつある。

ようやく今日になって、これまでの都市づくりの反省から、水と緑を求め

る動きが盛んになってきた。最近も世田谷の水と緑のシンポジウムでは、都市内の小さな湧水や流れを大切にすることが論ぜられ、名古屋での全国河川シンポジウムでは、三面ばり護岸の反省、水質の浄化、植栽護岸や河川沿いプロムナードの推進、親水公園などが論じられ、実行されるようになってきた。

* * *

このような動きの中で、建築物の外構にも池やせせらぎを造り、噴水を上げ、滝を落とすなど水を使う工夫がされており、都市に潤いを与えている。

四分の一世紀も前、初めての海外旅行のとき、ストックホルムのニュータウンの情景を新鮮に思い出す。ショッピングセンターの小さな池で子供が手製のヨットで無心に遊び、人々は何気なく見ている。ただそれだけのことで

ある。水は自然に都市になじんでいた。今日のように都市や建築物に水を持ち込む傾向は今後ともますます伸ばしてゆくべきである。やっとなったという感じだが、少し構え過ぎているのが気になる。もっと何気なく水があり、ふっと水に触れてみたくなる都市。親水などと物々しく言わないで気軽に水とつきあえる都市が欲しい。ドイツのフライブルグの町中では小石を敷きつめた小さな溝に水が流れる。実にさりげなくつつましいものであるが親しみがもてる。そんな水のある町は人々の心をいつも生き生きと楽しいものにするだろう。（たむら・あきら＝法政大学教授）